大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

卒業前看護技術トレーニングの効果：実施直後と就職後1ヶ月のアンケート調査より

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山居, 輝美, 登喜, 和江, 坂本, 雅代, 前川, 泰子, 今戸, 美奈子, 土居, 洋子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005612

Journal, Sch. of Nurs. Osaka Pref. Univ. Vol.12 No.1
大阪府立大学看護学部紀要　12巻1号，2006

原　著

卒業前看護技術トレーニングの効果

―実施直後と就職後1ヶ月のアンケート調査より―

山居　輝美・登喜　和江・坂本　雅代・前川　泰子
今戸美奈子*・土居　洋子

本研究は，卒業前看護技術トレーニングを行い，直後と卒業後1ヶ月のアンケート調査をもとに対象者のトレーニングに対する主観的評価について検討することを目的とした。卒業前看護技術トレーニングは，臨床実践への適応を目的に行っている自己トレーニングである。調査1（トレーニング直後）では，卒業予定者73名に質問紙を配布し，69名から有効回答を得た。調査2（卒業後1ヶ月）では調査1で回答のあった者に，郵送調査を実施し42名から有効回答を得た。その結果，ほぼ全員が参加してよかったと回答していた。また，トレーニングは自らの技術の評価をするきっかけともなっていた。卒業後1ヶ月では，トレーニングした看護技術を自信を持って実践できる段階にはまだ達していないことが示されたが，「行ったことのない看護技術も練習すればできる」と約9割の対象者が感じていた。よって，練習を繰り返し上手くいったという体験ができるトレーニングは，卒業後1ヶ月での技術に対する積極性や自信を高めていることが示唆された。

キーワード：看護技術トレーニング，卒業生，看護学生

Ⅰ．はじめに

日本において，リアリティショックの問題が取り上げられすでに20年が経過した。その間新卒看護師の教育に関しては，入職前後の研修制度や教育プログラムの導入，プリセプターシップなど新人教育に多くの取り組みがなされている（吉田ら，2003；武知ら，2003；三輪ら，2004）が，新卒者は，多くの看護技術を国家試験に合格してから，つまり看護師として採用されて初めて行うというのが現状（井部，2001）である。水田（2004）は，学校において，看護職に向けて3～4年の準備を行ったにもかかわらず，新卒看護師が離職していくことは看護基礎教育をも考えていく必要があると指摘している。現行の看護大学における看護学教育は，大学教育として行われることに重点が置かれているため，実習時間は少なく，さらに病院実習においても患者に対して看護援助としての看護技術を実施することなく卒業していく学生も少なくない。そのため，西上ら（2002）が卒業前に行った面接調査では，10名の対象者のうち8名が就職前の心配事として「看護技術などの看護能力」としており，「職場での人間関係」と同じ割合で心配なことにあげていた。

稲垣ら（2004）は，患者にとって安全・安楽であり，安心して受けることができる看護技術を実践できる能力を身につける必要性があるとして，平成13年度より卒業前に学生を対象とした看護技術トレーニング（以下，トレーニング）を行っている。トレーニングの項目は，就職後すぐに必要と考えられる診療に伴う援助技術のなかで，学生が実施に困難を感じている「採血」「輸液準備」「輸液ポンプ操作」「創部消毒・ガーゼ交換」「膀胱留置カテーテル」の5項目である。これらの項目は，トレーニング前後の調査結果では，学生の「実施できる自信」は有意に高くなったが，卒業後にこのトレーニングがどのように活かされているか，就職後のトレーニングの評価は行われていない。そこで今回，トレーニング直後（以下，卒業前）と卒業後1ヶ月に技術トレーニングについて調査を行いその効果について検討することを目的とした。

Ⅱ．目　的

卒業前と卒業後における卒業前看護技術トレーニングの効果を明らかにする。

Ⅲ．研究方法

本研究は，トレーニングの効果を明らかにするために，質問紙を用いた量的記述的研究である。

＊兵庫県立大学看護学部

1．調査対象者

講義，演習，臨地実習を全て終えた卒業予定者83名のうち参加を希望した4年制大学看護学部4年生73名である。

2．調査方法

トレーニング当日（2004年3月9，16，17日の何れかの日（以下，調査1））と就職後1ヶ月（調査2）を目安に自記式質問紙調査を行った。質問紙は独自に作成した。

3．調査内容（表1）

質問項目は，トレーニングに参加した対象者がトレーニングの方法や内容について満足しているのか，トレーニングが技術学習への動機付けとなり，それが就職後どのように継続・変化しているのか，トレーニングに参加することは自らの技術への達成感が高まるのか，そしてその達成感は就職後において継続・変化するのかという視点のもと，技術トレーニング評価研究会メンバーで話合い決定した。

決定した質問項目は，調査1では，対象者の背景，技術学習への動機付けに関するもの，技術への達成感に関するもの，トレーニング内容への満足感に関するもの，トレーニング方法などの全体評価に関するものなどについてであった。調査2は，対象者の背景，技術学習への動機付けに関するもの，技術への達成感に関するもの，トレーニング内容への満足感に関するもの，トレーニング方法などの全体評価に関するもの，実施したかった項目，就職後の技術研修の有無，トレーニング項目に関する要望などであった。調査1および調査2には，トレーニングに関して感想を自由に記述する欄を設けた。

4．分析方法

調査1，2における記述統計では，各項目ともに「非常にそう思う」から「全くそうは思わない」の5段階で回答を求め集計を行なった。評定は5件法で「非常にそう思う」を5点，「全くそうは思わない」を1点とし得点を算出した。否定的な項目は回答を反転させて点数化し，得点が高いほど評価が高いとした。

表1　トレーニング直後および就職後1ヶ月に実施した質問項目

トレーニング直後（調査1）に行った質問内容	就職後1ヶ月（調査2）に行った質問内容
・技術学習への動機付けに関する質問	・技術学習への動機付けに関する質問
看護技術に対して関心が広がった	看護技術に対する関心が広がった
自分の技術を評価する機会となった	自分の技術を評価する機会をつくっている
技術の自己学習のキッカケとなった	就職してからも技術の自己学習を続けている
他の看護技術についても学習していこうと思う	トレーニング後に項目以外の技術も本や雑誌などで自己学習した
トレーニングに参加するのに改めて勉強して臨んだ	
・技術への達成感に関する質問	・技術への達成感に関する質問
臨床で積極的に技術にトライできそうだ	積極的に看護技術にトライできている
トレーニングした看護技術に対する自信がもてた	トレーニングした看護技術を自信を持って実践できている
技術が身に付いた	トレーニングで技術が身についていたと思う
自分の技術に不安がでてきた ＊	今まで実施したことのない看護技術も練習すればできると思う
臨床で行われる看護技術のイメージができた	
・トレーニング内容への満足感に関する質問	・トレーニング内容への満足感に関する質問
トレーニングに楽しく参加することができた	採血のトレーニングは実践の場で助けになっている
トレーニング内容は興味深かった	創部の消毒・ガーゼ交換のトレーニングは実践の場で助けになっている
学生デモで技術の要点の再確認ができた	輸液のトレーニングは実践の場で助けになっている
トレーニングで新たな発見があった	輸液ポンプのトレーニングは実践の場で助けになっている
有益なトレーニングであると思った	シリンジポンプのトレーニングは実践の場で助けになっている
	膀胱留置カテーテルのトレーニングは実践の場で助けになっている
・全体評価に関する質問	・全体評価に関する質問
グループの人数は適切であった	トレーニングは実践の場で役にたった
トレーニング項目によって学びに差があった ＊	トレーニングした内容と実際にギャップを感じた ＊
トレーニングの各項目に対して時間は適当であった	卒業前技術トレーニングに参加してよかったと思う
実施した時期は適切であった	
学生デモで看護者役をした人としなかった人では学びに差があった ＊	

＊逆転項目

「実践していない」は分析から除いた。記述統計量を算出し，平均値の比較はt検定を行い，統計学的有意差は$p<0.05$を採用した。分析には，統計パッケージSPSS 11.0J for Windowsを用いた。

5．倫理的配慮

トレーニング内容の説明および参加希望調査時，オリエンテーション時に調査の主旨，質問紙は無記名で強制ではないこと，トレーニング内容に影響は及ぼさないこと，調査紙は研究以外に使用しないことを説明した。調査2についても質問紙の送付時，同様の文書による説明を加え同封し，質問紙の回収をもって同意とみなした。また，調査紙の送付先は，対象者に記入してもらった。

Ⅳ．卒業前看護技術トレーニングの概要

卒業前看護技術トレーニングは，臨床実践への適応を目的に平成13年度より行っている自己トレーニングである。トレーニングの時間配分およびスケジュールは教員が調整するが，参加は自由である。トレーニング項目は，先行研究（稲垣ら，2002）により決定した「採血」，「輸液準備」，「輸液ポンプ操作」，「創部消毒・ガーゼ交換」，「膀胱留置カテーテル」の5項目である。事前に対象者の参加可能日を調査し，実施日を設定した。

トレーニングは1項目45～90分で，全てを1日で終了できるプログラムであった（表2）。対象者は11～13名で1グループとなり，ビデオや1項目1～2名の教員によるデモンストレーションで注意点やコツなどの追加説明を受けた。その後，対象者は2～3人ずつで1組となり対象者同士でトレーニングを行った。教員は，その状況や方法をみながら，再度説明を行い実施するうえで対象者が抱いた疑問や質問について応答した。対象者同士のトレーニングが終了すると，1～2項目毎に対象者がデモンストレーション（以下，学生デモ）を行い，手技の共有や疑問点の解決の場としての意見交換を行った。1項目が終了すると，対象者は次の項目に移動し同様の方法でトレーニングを行った。

表2　自己トレーニングのスケジュール（1例）

9：50～10：00	オリエンテーション
10：00～11：30	採血
11：30～12：00	学生デモンストレーション
13：00～13：45	創部消毒・ガーゼ交換
13：45～14：30	膀胱留置カテーテル
14：30～15：00	学生デモンストレーション
15：00～15：45	輸液の準備
15：45～16：30	輸液ポンプ
16：30～17：00	学生デモンストレーション

トレーニングに先立ち，対象者には事前学習としてWeb上で閲覧できる自己学習用ビデオ，教科書，参考図書，およびビデオを見ておくことを推薦した。

Ⅴ．結　果

1．調査1について

1）対象者の背景

配布数73，回答者71名（回収率97.3%）であり，有効回答は69名であった。調査1，2において進学者は今回の分析から除外した。女性65名（94.2%），男性4名（5.8%），平均年齢は22.68（SD＝2.7）歳であった。1日あたりのトレーニング参加人数は，24～25人であった。

2）技術学習への動機付け

技術学習への動機付けに関する項目では，図1に示すように〈他の看護技術についても学習していこうと思う〉〈技術の自己学習のきっかけとなった〉は32名（46.4%）の対象者が，「非常にそう思う」と回答しており，「そう思う」を含めると順に66名（95.7%），63名（91.3%）であった。また，〈自分の技術を評価する機会となった〉という質問に対しても，「非常にそう思う」「そう思う」を合わせると66名（95.7%）であった。〈看護技術に対して関心が広がった〉は，「非常にそう思う」「そう思う」を合わせると58名（84.1%）であった。技術学習への動機付けが低かったのは〈トレーニングに参加するのに改めて勉強して臨んだ〉であり，「非常にそう思う」「そう思う」を合わせると34名（49.3%）であった。「全くそうは思わない」「そうは思わない」と回答した対象者は20名（29.0%）であった。これらに関する自由記述には「あやふやな知識技術が自分に振りかかってくることが身にしみてわかった」や「就職前に確認できてよかった。自分の勉強不足を自覚できた。今後勉強して頑張りたい」「導入もデモンストレーションの他にビデオを見ておけばよかった。予習しておくべきだった」などがあった。

3）技術への達成感

技術への達成感に関する項目では，図2に示すように，〈技術が身についた〉〈トレーニングした看護技術に対する自信がもてた〉といった技術に対する自信が高まったことに対して「非常にそう思う」「そう思う」を合わせると順に53名（76.8%），43名（62.3%）であった。〈臨床で行われる看護技術のイメージができた〉〈臨床で積極的に技術にトライできそうだ〉といった臨床で働くことへの意欲についても順に54名（78.3

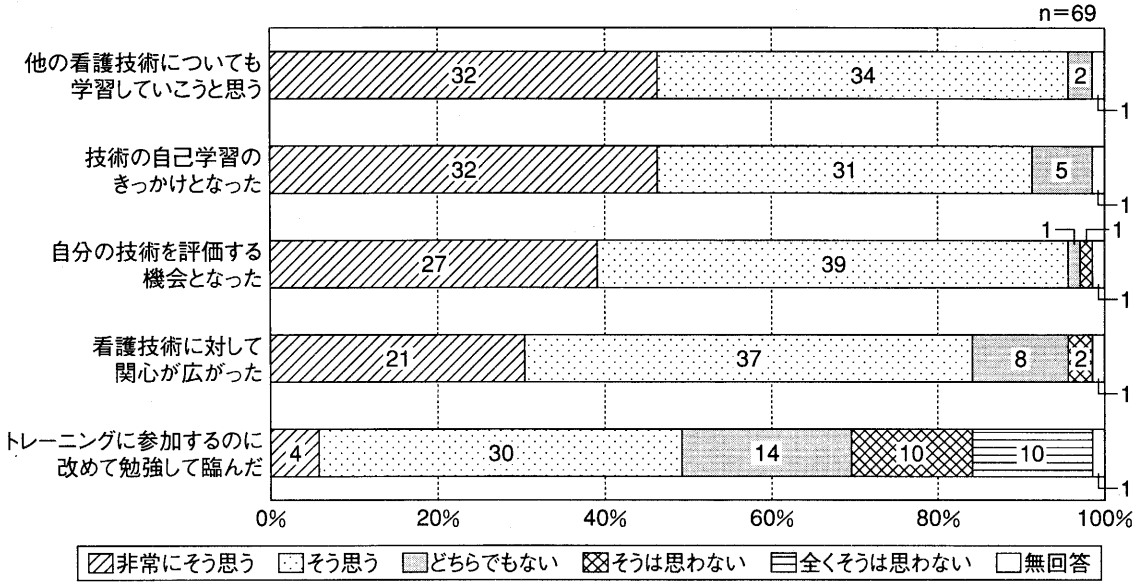

図1　技術学習への動機付け（卒業前）

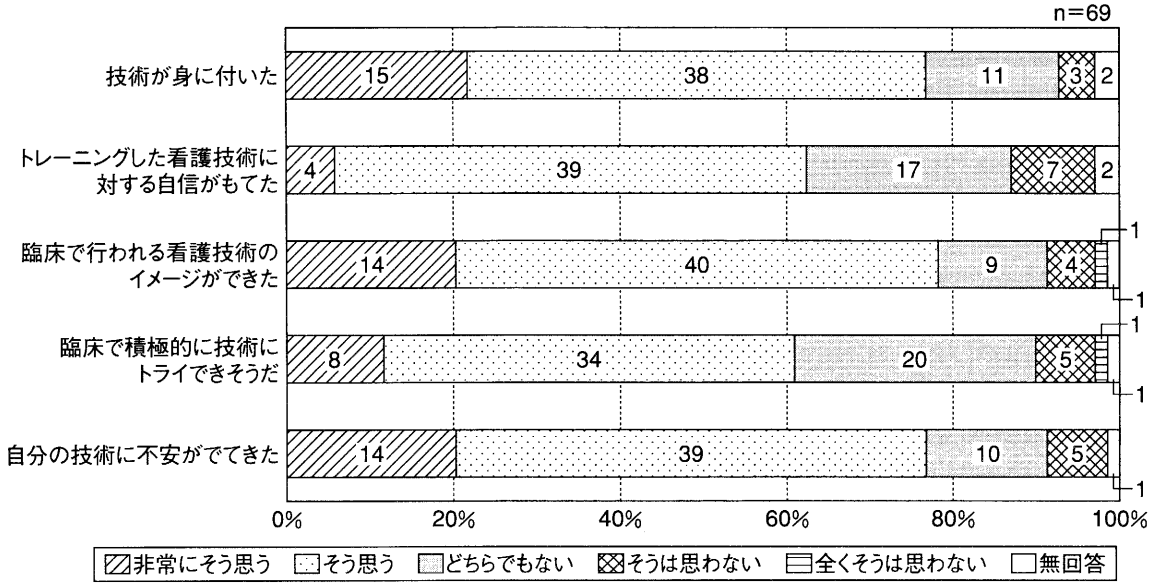

図2　技術への達成感（卒業前）

%），42名（60.9%）の対象者が「非常にそう思う」「そう思う」と回答していた。自由記述には「採血が基礎看護の時うまくできなくて，就職後に不安があったので，今回練習できてよかった」や「少しだが働くことに対して不安が消えた」「1・2年の時はなんとなく技術練習をして4年になったときでも採血とか実習できない技術が不安だったが，このような場がもてて自信につながった」などがあった。一方，トレーニングを行ったことで〈自分の技術に不安がでてきた〉は，「非常にそう思う」「そう思う」を合わせると53名（76.8%）であった。

4）トレーニング内容への満足感

トレーニング内容への満足感に関する項目では，図3にも示すように，〈トレーニング内容は興味深かった〉〈トレーニングに楽しく参加することができた〉〈有益なトレーニングであると思った〉といったトレーニングの内容に対する評価は，ほぼ全員の対象者が「非常にそう思う」「そう思う」と感じていた。また，〈トレーニングで新たな発見があった〉といった新たな知識を得たということに対しても65名（94.2%）の対象者が「非常にそう思う」「そう思う」と感じていた。〈学生デモで技術の要点の再確認ができた〉といった学生デモに対する質問に対して60名（87.0%）の対象者が「非常にそう思う」「そう思う」と感じていた。

5）全体評価

全体評価は，図4に示すように，〈グループの人数は適切であった〉〈実施した時期は適切であった〉と

いった人数と時期については順に61名（88.4%），58名（84.1%）の対象者が「非常にそう思う」「そう思う」と回答していた。〈トレーニングの各項目に対して時間は適当であった〉というトレーニング項目の時間に対しては，43名（62.3%）の対象者が「非常にそう思う」「そう思う」と感じていたが，12名（17.4%）の対象者は「そうは思わない」と感じていた。トレーニング時間の自由記述をみると，「時間が短い」と書いた者が6名おり，内訳は「膀胱留置カテーテルの時間が短かった」が3名，「1日だけでなく何度（何日）も行いたい」が3名であった。「時間が長かった」と書いた者も3名であった。〈トレーニング項目によって学びに差があった〉では，「非常にそう思う」「そう思う」と回答した者は23名（33.3%），「全くそうは思わない」「そうは思わない」は22名（31.9%）であった。「非常にそう思う・そう思う」と回答した対象者でトレーニング項目についての自由記述があったものをみると，「輸液ポンプが難しい」「興味のある内容に参加したい」が1名ずつであった。学生デモを行った対象者は，24名であったが，〈学生デモで看護者役をした人としなかった人では学びに差があった〉では，22名（31.9%）の対象者が「そうは思わない」と感じており，13名（18.8%）の対象者は「非常にそう思う」「そう思う」と感じていた。これらの学生デモを行った対象者の平均点は2.87（SD＝0.7）点であり，行わなかった対象者は3.25（SD＝0.8）点であった。これら学生デモの実施の有無別にみた学びの差についてt検定を行ったところ，有意差は認められなかった。学生デモに対する自由記述には「学生デモで新たな発見があったり，人からいい点，悪い点を教えてもらえて有意義であった」

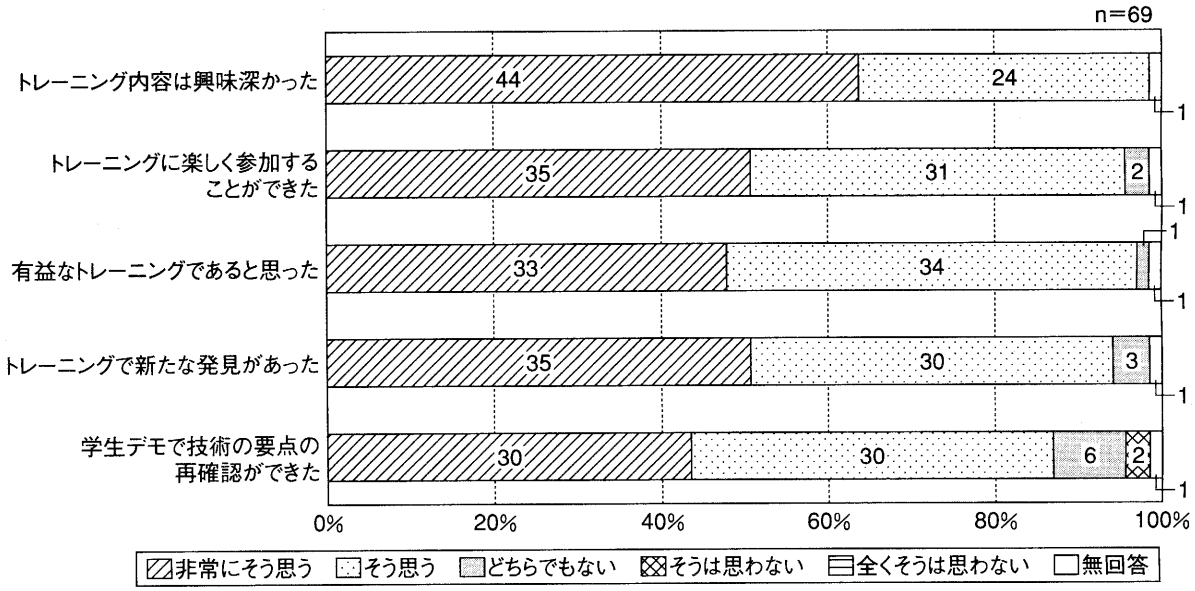

図3　トレーニング内容への満足感（卒業前）

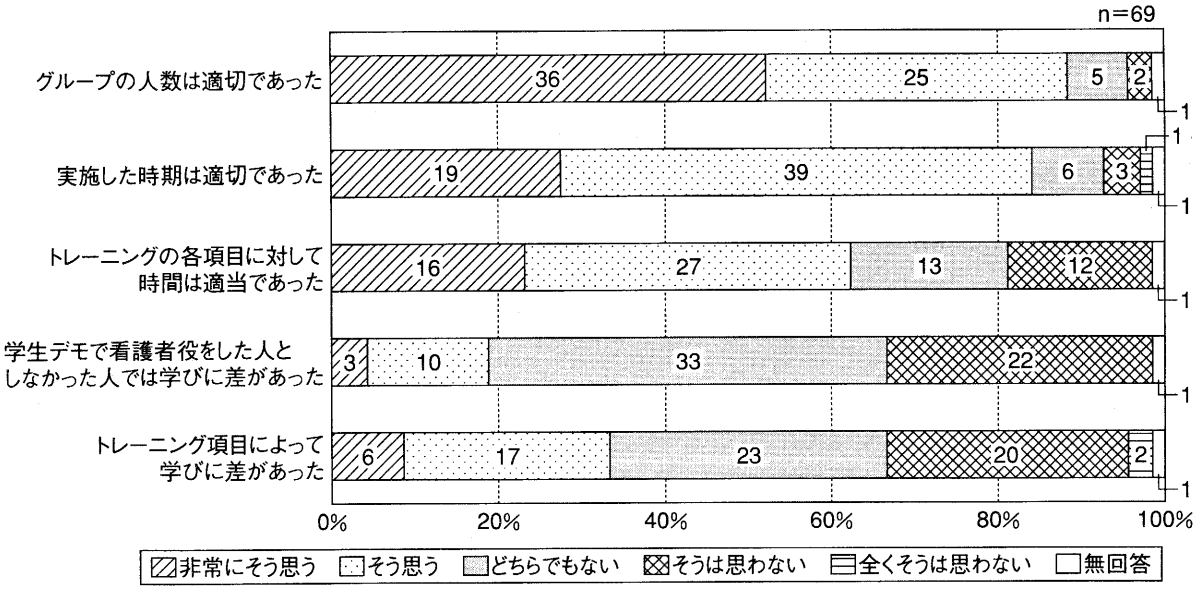

図4　全体評価（卒業前）

などがあった。

2．調査2について

1）対象者の背景（表3）

配布数71，回答者43名（回収率60.6%）であった。有効回答は42名であった。女性41名（97.6%），男性1名（2.4%），平均年齢は23.19（SD＝3.3）歳であった。看護師36名（85.7%），助産師5名（11.9%），保健師1名（2.4%）であった。病院または診療所に就職した者41名の勤務科は，外科系12名，小児科9名，内科系7名，産科6名，精神科3名，その他4名であった。

2）技術学習への動機付け

技術学習への動機付けに関する項目では，図5に示すように「非常にそう思う」「そう思う」を合わせると35名（83.3%）の対象者が〈就職してからも技術の自己学習を続けている〉と回答していた。〈看護技術に対する関心が広がった〉という技術への関心についての質問は「非常にそう思う」「そう思う」を合わせると27名（64.3%）であった。〈トレーニング後に項目以外の技術も本や雑誌などで自己学習した〉という質問に対しては，30名（71.4%）の対象者が「非常にそう思う」「そう思う」と回答していた。〈自分の技術を評価する機会をつくっている〉という自分の技術に対する振り返りに関しては「非常にそう思う」「そう思う」と回答した対象者は20名（47.6%）であった。これらに関する自由記述は「実際に自分が就職したら自分がする意識を持っていないと身につかず，ただやってみただけになる」や「基礎実習を振り返り知識の再確認を行うよい機会になった」「トレーニングは無駄ではないと思う。学生の自覚しだいで無駄にも有益にもなる。もっとまじめに取り組めばよかったと後悔している」などであった。

表3　対象者の背景

(n=42)

項　目	内　容	人数	%
性　別	女性	41	97.6
	男性	1	2.4
業　種	看護師	36	85.7
	助産師	5	11.9
	保健師	1	2.4
就職先	病院または診療所	41	97.6
	保健センター・保健所	1	2.4
就職先	外科系	12	28.6
	小児科	9	21.4
	内科系	7	16.7
	産科	6	14.3
	精神科	3	7.1
	その他	4	9.5
	無回答	1	2.4

3）技術への達成感

技術への達成感に関する項目では，図6に示すように〈今まで実施したことのない看護技術も練習すればできると思う〉という質問に対して「非常にそう思う」「そう思う」を合わせると37名（88.1%）がそのように感じていた。〈積極的に看護技術にトライできている〉については，23名（56.1%）の対象者が「非常にそう思う」「そう思う」と回答していた。〈トレーニングで技術が身についていたと思う〉についても20名（47.6%）の対象者が「そう思う」と回答していた。〈トレーニングした看護技術を自信を持って実践できている〉については，「非常にそう思う」「そう思う」と回答した対象者は，11名（27.5%）であり，「そうは思わない」「全くそうは思わない」と回答した対象者は，14名（35.0%）であった。これらに関する自由記述は「トレーニングのために最初の一歩が少しだけ自信を持って踏み出せた」や「全体的に時間が少なかったた

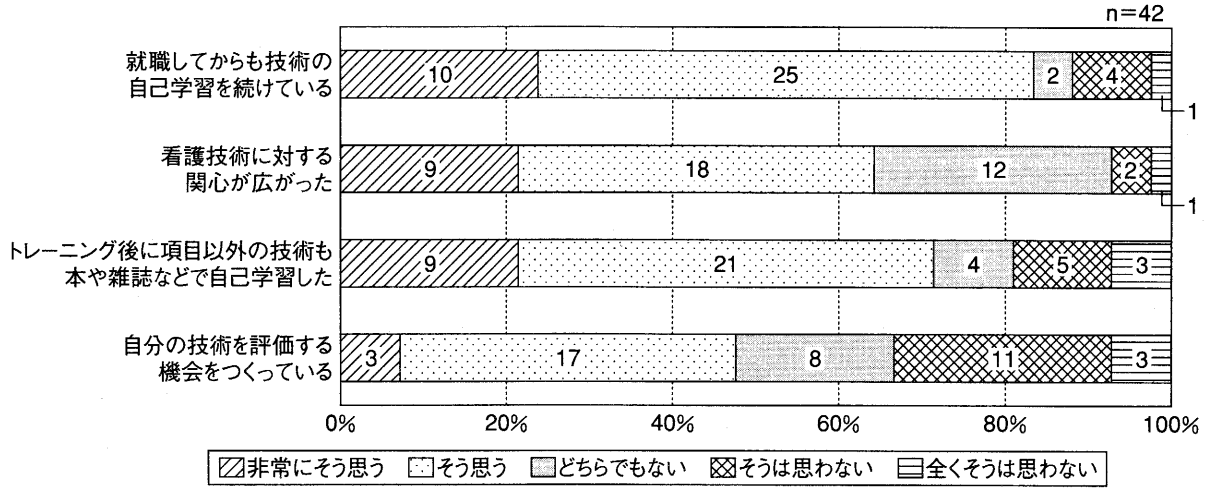

図5　技術学習への動機付け（就職後1ヶ月）

め，完璧に習得するには到らなかった。しかし，一度できたんだという思いを持つことはできたのでよかった」「トレーニングでの成功体験が役に立っている」などであった。

4）トレーニング内容への満足感

トレーニング内容への満足感に関する項目では，図7に示すように実施したトレーニングの中では「非常にそう思う」「そう思う」と回答した対象者は採血の項目が最も多く，次いで，輸液，輸液ポンプ，シリンジポンプ，創部の消毒・ガーゼ交換，膀胱留置カテーテルの順であった。自由記述は「みるだけでなく実際のものを触ってトレーニングできたのはとてもためになった」「ミキシングの回数が多くアンプルカットなどトレーニングでやっていたため役立っている。輸液，シリンジポンプもまだ慣れずに触るのが怖いのだがトレーニングにとりいれてもらいよかったと思う」「起こりやすい異常やその対処を知らないと現場では難しい」などであった。

5）全体評価

全体に関する項目では，図8に示すように〈トレーニングに参加してよかったと思う〉との質問に対して「非常にそう思う」「そう思う」と回答したのは，ほぼ全員の97.6%であった。また，トレーニングに対しても〈実践の場で役にたった〉と感じているのは，36名（87.8%）の対象者であった。〈内容と実際にギャップを感じた〉については「非常にそう思う」「そう思う」を合わせると18名（43.9%）であり，「そう思わない」と回答した対象者は12名（29.3%）であった。ギャップについて「そう思う」と回答した対象者の自由記述をみると，「輸液が特にギャップを感じた。器具の操

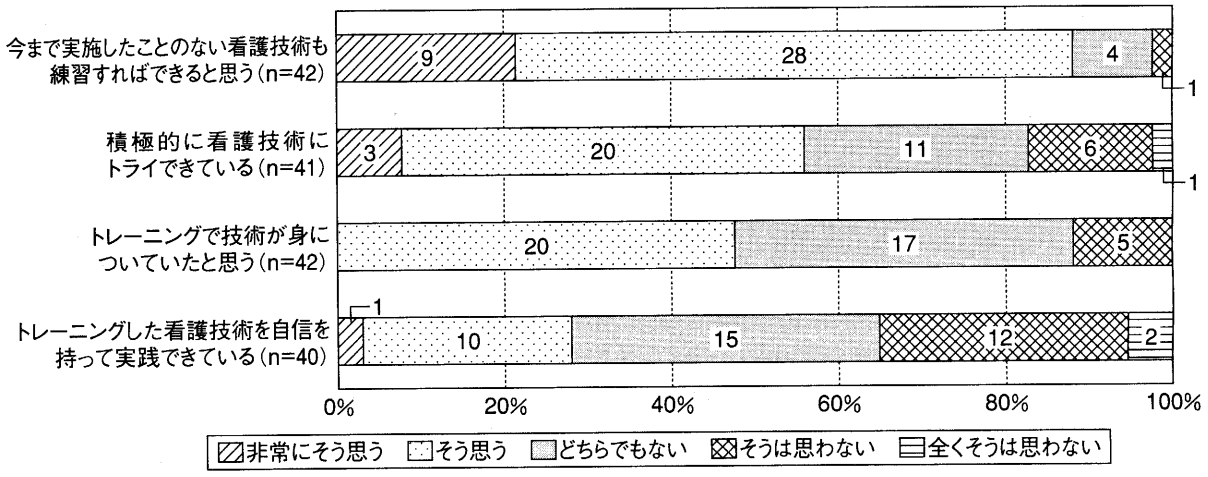

図6　技術への達成感（就職後1ヶ月）

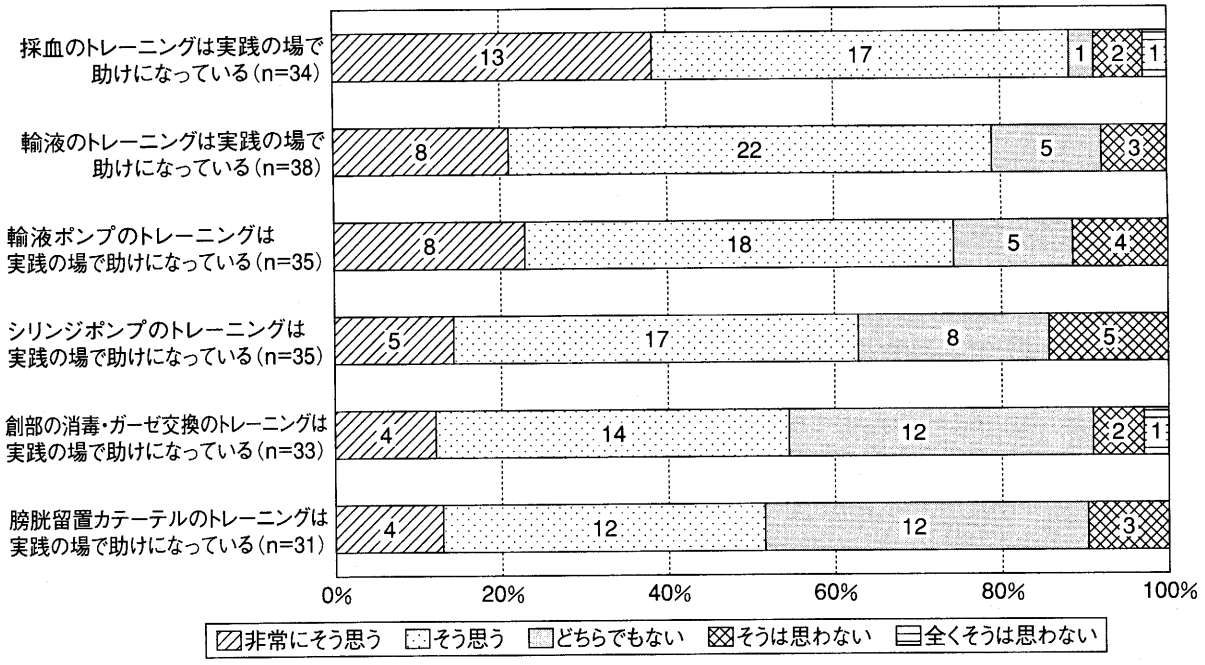

図7　トレーニング内容への満足感（就職後1ヶ月）

作や輸液が患者につながっているという状況まで考えトレーニングをすることが大事だと思った」「肢体不自由者を対象とする施設に就職したため生活支援技術が多くその知識も技術も曖昧である」「小児科では中心静脈ラインを利用しているので血管を確保することはない」「施設ごとに順序や方法が多少変化するにしても大学で学んだ技術が役に立っている」「技術の方法および物品は施設により違いがあるが，基本を学んでいると応用がきくと感じている」などであった。

6）就職後の技術研修

就職した施設での技術研修の有無をきいたところ，研修があったと回答したものは39名（92.9%）であり，研修はなかったと回答したものは3名（7.1%）であった。トレーニングを実施した項目で受けた技術研修のうち最も多かったのは，採血であり，次いで膀胱留置カテーテルの順であった。技術研修についての自由記述は「病院での技術研修時，トレーニングを踏まえ少し余裕を持ってできた」「NICU勤務で必要性が少なく（病院での）研修がうまくいかなかった」「トレーニングのおかげで就職後の研修やトレーニングのイメージがつきやすかった。自信がついて積極的になれた」「就職後の研修で看護技術のトレーニングがあったが事前に確認ができていてよかった」などであった。

7）トレーニング項目に対する要望（表4）

実施したかった項目をきいたところ30名67件の回答があった。実施希望項目として最も多かったのは，注射や注射針・注射器の取り扱いなど与薬に関することであり，次いで吸引であった。

表4　実施希望項目

（n=30，複数回答）

モニタリング	心電図	1
	NST装着	1
食事・水分摂取援助	食事介助	1
排泄の援助	排泄介助	1
整容の援助	各種ルート挿入中の更衣	4
姿勢の保持・移動動作介助	移乗	2
	体位変換	1
与薬	点滴静脈内注射（準備・固定含む）	6
	皮内注射	3
	筋肉内注射	2
	静脈内注射	2
	採血後静注連結	1
	閉鎖式ルート	1
	内服薬	1
注射針・注射器の取り扱い	翼状針	4
	留置針	3
	注射器	1
生命維持的処置管理	緊急時の対処法	2
	輸血	1
	酸素マスク	1
	気管内挿管	1
	吸引	11
	経管栄養	1
チューブ／ドレーン管理	ヘパリンロック	3
	ルートトラブル時の対処	3
	無菌操作	1
	ドレーン類の管理	1
	ルート交換	1
排泄処置管理	導尿	1
	浣腸	1
	摘便	1
他	他	3

Ⅵ．考　察

1．卒業前トレーニングに参加する理由と満足感

学生にとって看護技術の学習は，看護を実践するうえで基本となるが，基礎教育で完全に技術を習得し，実践に応用することには限界がある。まして，卒業前の学生は，卒業論文や国家試験などの準備のため実践

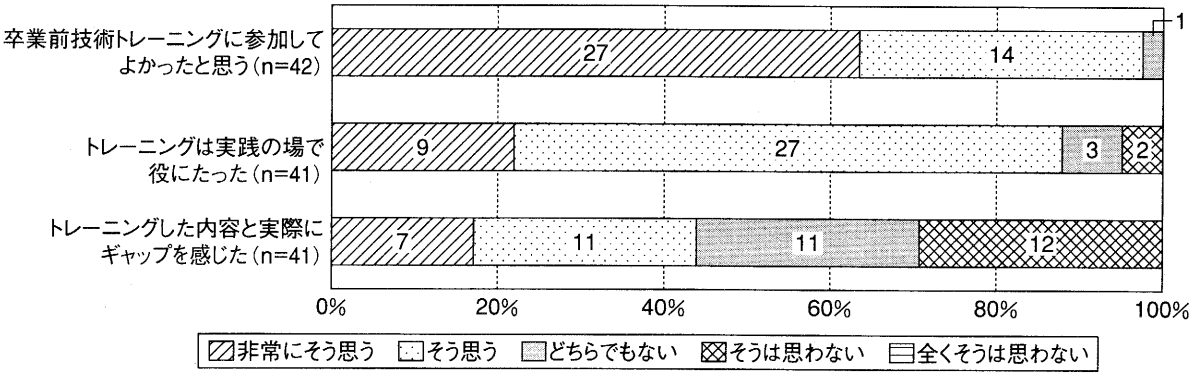

図8　全体評価（就職後1ヶ月）

から遠のくことが多い。精神医学辞典（1993）によると，広い意味で直面せざるをえない困難な状況を前にするとき人間誰にでも生じる不安状態を予期不安というが，学生は就職という新たな環境に向かうにあたり予期不安を抱えているものと考えられる。そのため，卒業を間近に控えた対象者は，その不安を解消するために卒業予定者の約9割がトレーニングの参加を希望し，看護技術の習得を期待したものと思われる。

今回のトレーニングから新たに学生デモを取り入れたが，学生デモの実施の有無別にみた学びの差について有意差は認められなかったことや，「学生デモで新たな発見があった」という自由記述から看護師役をしなかった対象者においても学生デモは学びにつながったと考えられる。人は予期不安を克服するために，あらかじめ予想される状況を繰り返し心に描くという方法を用いる（G Hennenhofer, K D. Heil, 1993）。何度も繰り返し実施できるトレーニングであったことや，患者への看護場面を設定して実施したことは，対象者の不安の解消に役立ったものと考えられる。また，トレーニングの内容に対して「非常にそう思う」「そう思う」と回答した対象者は〈内容は興味深かった〉68名（98.6%），〈楽しく参加することができた〉66名（95.7%），〈有益であると思った〉67名（97.1%），〈新たな発見があった〉65名（94.2%）とほぼ全員が回答していたことや，同様に調査2についても〈参加してよかった〉41名（97.6%），〈実践の場で役立った〉36名（85.7%）であった。このことは，採血や輸液に関する技術は臨床で実践する回数の多い項目であるにも関わらず実習での経験度が低く主観的自立度が低い項目であった（野戸ら，2004）ことから対象者にとってトレーニングは満足度が高く有効であったと考えられる。

2．主体的な看護技術学習へのきっかけ

〈他の看護技術についても学習していこうと思う〉〈技術の自己学習のきっかけとなった〉は対象者の9割以上が「非常にそう思う」「そう思う」と回答している。対象者はトレーニングに参加し，実際に自分たちが看護技術を行ったことで学習の必要性を感じ自己学習のきっかけとなったと考えられる。しかし，調査2で〈トレーニング後に項目以外の技術も本や雑誌など自己学習した〉は「非常にそう思う」「そう思う」を合わせると7割と減っていたことから意欲は高まったものの，実際に自己学習を行っている者は減少していることが考えられた。しかし，「一度できたのだという思いを持つことができたのでよかった」「トレーニングでの成功体験が役に立っている」などの記述から7割の対象者はトレーニングに参加し満足感を得たことや，看護職は専門的知識が必要不可欠であることが就職後も学習活動を行っていると考えられる。

また，トレーニングに参加した9割以上の対象者が〈自分の技術を評価する機会となった〉という質問に対しても，「非常にそう思う」「そう思う」と回答しており，トレーニングは自らの技術を評価するきっかけともなっていた。また，トレーニングで何度も実施し，友人同士あるいは教員からの成果やどうすれば上手くできるのかなどの情報交換をすることで自分なりに方法を工夫し，試行錯誤をする機会となったことも考えられる。

トレーニングを受けるにあたって事前に勉強してくるように伝えてあったが勉強をしてきた対象者は約半数であり，受身の態度でのトレーニング参加であったことを示している。就職後，自らの看護活動には自己学習や事前学習が必要不可欠となる。しかし，トレーニングが自らの技術を評価するきっかけとなったことや「技術トレーニングは無駄ではないと思う。学生の自覚しだいで無駄にも有益にもなる。もっとまじめに取り組めばよかったと後悔している」という言葉に表されているように自分自身の学習態度を振り返るきっかけともなっていた。

3．トレーニングが対象者にもたらした看護技術に対する積極性と自信

卒業を直前に控え，トレーニングを行った「診療の補助に伴う援助」について対象者は経験が少なく実施できる自信も低いことが考えられる。しかし，調査1で〈技術が身に付いた〉，〈トレーニングした看護技術に対する自信がもてた〉について「非常にそう思う」「そう思う」を合わせると順に76.8%，62.3%であったことは，トレーニングを行い自分たちの技術の振り返りを行ったことで自信がついたものと思われる。また，60.9%の対象者は〈積極的に技術にトライできそうだ〉と感じている。一方，〈自分の技術に不安がでてきた〉という質問に「非常にそう思う」「そう思う」と回答した対象者は76.8%であったことから，トレーニングで技術を練習するうちに自分の技術に不安も感じたことが考えられた。調査2において〈就職後積極的に看護技術にトライできている〉という質問に「非常にそう思う」「そう思う」と回答した対象者が56.1%であったことや，〈トレーニングした看護技術を，自信を持って実践できている〉という質問に「そうは思わない」「全くそうは思わない」と回答した対象者は35.0%であったことは，自信を持って実践できる段階にはまだ到ってないことが考えられた。しかし，行ったことのない看護技術も練習すればできると約9割の対象者が感じていることは，トレーニングを行ったことで練習すればできるようになったという体験が大きかったのではないかと考えられる。しかし，阿曽（2001）は新卒者の臨床実践能力について行った研究

で，臨床が必要とするレベルと新卒者への評価の差，新卒者の自己評価の甘さがあったと述べている。今回の調査は対象者自身が自己評価した主観的な評価に基づいている調査を行ったため，自己評価に関しては甘さがあることも否めないが，「最初の一歩が少しだけ自信を持って踏み出せた」「成功体験が役に立っている」という記述からトレーニングでの成功体験は就職後に行う技術に対する積極性や自信を高めていることが考えられる。

4．トレーニング方法の評価

〈トレーニングの各項目に対して時間は適当であった〉というトレーニング項目の時間に対しては，17.4%の対象者は「そうは思わない」と感じていた。短いと感じた者は，もう少しトレーニングしたいという希望であった。長いと感じた者はトレーニング一つの項目は60～90分であったため，集中してトレーニングに参加し，全て終了する頃には夕方になってしまうことから，授業や決まった学習スケジュールを持たない時期の対象者にとっては時間が長いと感じたことが考えられる。

時期に関しては，3月にインターンシップ制を取り入れている施設の受け入れ側の課題として「3月は異動時期であり，充分にかかわれない」という意見があり（鶴田，2002），今後も施設で3月に行われることは困難であると考えられる。また，学内において卒業前の3月にトレーニングを行ったことは，就職に向けて期待と不安の入り混じっている時期でもあり，トレーニングへの意欲が高まる時期であったため効果的であったと考えられる。しかし，約4割の対象者は「内容と実際にギャップを感じた」と回答しており，就職先が様々で所属する診療科が決定していない対象者が参加するトレーニングをどのように企画・運営し，内容を対象者の就職予定科に近づけていくかが今後の課題である。

実施を希望するトレーニング項目では，与薬に関する内容が最も多く，特に注射に関するものに2人に1人の割合であがっていた。次に吸引の項目も3人に1人の割合で希望していた。これらの技術は清潔操作に加え，時期やタイミングなどの複雑さ，患者に負荷をかける恐れのある技術であり，新人看護師にとっても負担の大きな技術であると考えられる。今後これらの対象者の希望を取り入れた項目について検討する必要があると思われる。これらの希望などを聞いた調査2の回収率は60.6%であり，全員の意見が反映された結果ではないが，研究目的を保証できる回収率であったと考えられる。回収率については，慣れない勤務形態や緊張度の高い時期であったことから調査に関与できる余裕がなかったためと推測できる。

まとめ

トレーニングの卒業前と就職後の効果について検討するために，参加を希望した4年制大学看護学部4年生73名を対象として，質問紙調査法を行い，以下の結果を得た。

1．技術学習への動機付けは，トレーニング直後の卒業前調査では9割以上の対象者がトレーニングに参加したことで学習の必要性を感じ自己学習のきっかけとなったことを感じていた。しかし就職後の調査では，自己学習をしている者は減少しており，意欲は高まったものの実際に自己学習を行っている者は減少していることが考えられた。
2．技術への達成感は，卒業前調査では76.8%の対象者が〈技術が身についた〉と感じている反面，〈自分の技術に不安がでてきた〉と回答していた。就職後の調査では，56.1%の対象者が〈積極的に看護技術にトライできている〉と回答したが，33.3%の対象者は自信を持って実践できる段階にはまだ到っていない。しかし，88.1%の対象者は行ったことのない看護技術も練習すればできると感じていた。
3．満足感と全体評価は，卒業前調査における〈内容は興味深かった〉〈楽しく参加することができた〉〈有益であると思った〉といったトレーニングの満足感や，就職後の調査における〈参加してよかった〉〈実践の場で役立った〉といった全体評価に関して，ほぼ全員の対象者が「非常にそう思う」「そう思う」と感じていた。
4．学生デモの実施の有無別にみた学びの差はなかったことから看護師役をしなかった学生においても学生デモは学びにつながった。

引用文献

阿曽洋子（2001）：新卒者の臨床実践能力．看護展望，26 (5)，535-540.

G Hennenhofer, K D. Heil（1973）：ANGST UBERWINDEN. Deutsche Verlags－Anstalt GmbH, Stuttgart.／生和秀敏，生和禎子 訳（1993）：不安の克服．p74. 北大路書房，京都.

井部俊子（2001）：看護婦の卒後臨床研修はなぜ必要か．看護展望，26 (5)，529-535.

稲垣美紀，土居洋子，西上あゆみ 他（2002）：学部学生の卒業時における看護技術の習得状況（第1報）．大阪府立看護大学看護学部紀要，8 (1)，47-52.

稲垣美紀，土居洋子，西上あゆみ（2004）：卒業直前の看護学部対象者の看護技術自己トレーニング効

果．大阪府立看護大学看護学部紀要，10 (1)，23-30.

加藤正明，保崎秀夫，笠原嘉 他 (1993)：新版 精神医学辞典，p 792．弘文堂.

三輪幸世，伊藤国枝 (2004)：看護師としての態度・行動を身に着けるための新人看護師教育．看護，56 (3)，54-58.

水田真由美 (2004)：新卒看護師の職場適応に関する研究―リアリティショックからの回復過程と回復を妨げる要因．日本看護科学学会誌，23 (4)，41-50.

西上あゆみ，土居洋子，西岡ひとみ 他 (2002)：本学卒業生の病院就職後早期の体験と思い．大阪府立看護大学看護学部紀要，8 (1)，53-60.

野戸結花，皆川智子，川崎くみ子 他 (2004)：看護対象者の看護基本技術の経験度と自立度．弘前大学医学部保健学科紀要，3，9-16.

武知葉子，松井節子 (2003)：就業前後にわたる技術研修と体験研修の実施．看護展望，28 (4)，432-438.

鶴田早苗 (2002)：新卒者の不適応問題および教育を考える．看護展望，27 (4)，423-428.

吉田みね，佐藤美重，渡辺由美子 他 (2003)：技術力育成のための新人教育プログラムの構築．看護展望，28 (4)，424-431.

The Effects of Training in Technical Nursing Skills Before and After Graduation: Questionnaire Data from New Graduates

Terumi YAMAI, Kazue TOKI, Masayo SAKAMOTO
Yasuko MAEKAWA, Minako IMADO, Yoko DOI

The purpose of this study is to clarify the effects of training in technical nursing skills before and after graduation. The pre-graduation study was based on a questionnaire administered to 73 students expected to graduate from a nursing college. The valid responses were 69 studens. The subjects of a post-graduation were new graduates who had also participated in the pre-graduation study. The valid responses were obtained from 42 people.

Results suggested that almost all subjects responded that practice was significant, both before and after graduation. Half of them took part in the practice unprepared. But they appreciated the training in technical skills and took advantage of the experience. After graduation, they did not apply nursing skills with every confidence; however, as much as 85 percent of the participants realized they could do well if they kept in practicing. Therefore, the training seemed to have enhanced the participants' positiveness and self-confidence in using technical nursing skills after graduation.

Key words: Training in technical nursing skills, New graduates, Nursing students